

日本の万葉仮名（漢字系文字・変用）

■万葉集の用字法

周辺民族が自らの言語を表記するために、既存の漢字の字形と字音を利用したもの（仮借）および字形と字義を利用したもの（訓読）を変用文字と呼ぶことにしている。そこで、万葉集の用字法をみると次の五つを挙げる事ができる。挙例は武田 1954 (pp. 321-324) により、五分類の名称は鶴久 1977 (pp. 220-235) によった。ただし鶴久 1977 は“音読、訓読”を“正音文字、正訓文字”とし、その一類として他に“義訓文字”をたてる。

1. 音読(字)・・・“力士(りきじ)、塔(たふ)、法師(ほふし)”など漢語の形と音と義をそのまま利用したもの。
2. 訓読(字)・・・“松、人、戀”など漢語の形と義を利用して和語で読んだもの。“丸雪(あられ)”などの義訓はここに含める。
3. 音仮名・・・草花のナデシコを“奈泥之故”と書く類。これは漢字の形と音を利用したもの。
4. 訓仮名・・・草のススキを“爲酢寸”と書く類。これは漢字の訓読をもとにして固定した音を利用したもの。
5. 戯書・・・“山上復有山”をイデと読み、“十六”をシシと読む類のもの。複数の漢字の義より別義の読みを連想させるもの。

音読は漢字で表記した漢語をそのまま利用した借用語であるから漢字の変用には含まないことにする。それ以外の訓読・音仮名・訓仮名・戯書は漢字の変用である。これらのうち、所謂万葉仮名と称されるものは音仮名と訓仮名であり、変用の典型ということになる。

■万葉集一例

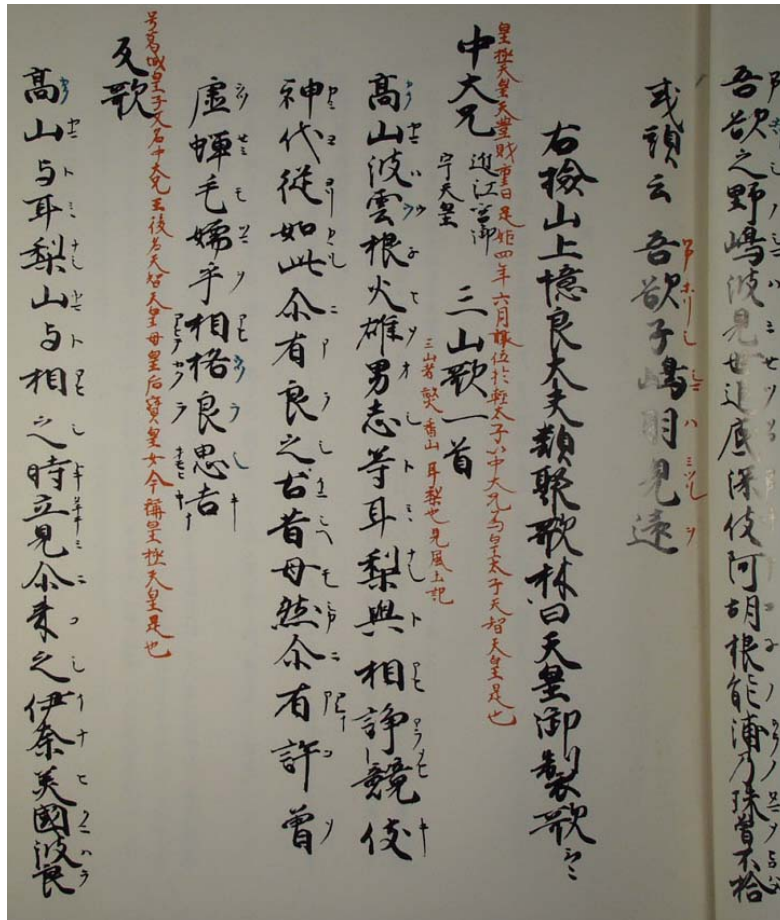
下に示した写真は万葉集古写本(西本願寺本万葉集)の一部。『万葉集』（鶴久・森山隆編、桜楓社）によった。写真中央は中大兄(天智天皇)の、三つの山(香具山と畝火山と耳梨山)の歌(第13番)で、その漢字を示すと次のとおり。

“高山波雲根火雄男志等耳梨與相諍競伎神代從如此尔有良之古昔母然尔有許曾虚蟬毛孀乎相格良思吉”

万葉集はこのような漢字の羅列から成っているわけであるが、これをどのように読むか。平安時代の初めには読み難くなっていたようであり、以来様々な読みが試みられ今日にいたっている。いま、『万葉集』（鶴久・森山隆編、桜楓社）の読みを示せば次のとおり。

高山波　雲根火雄男志等　耳梨與　相諍競伎　神代從
かぐやまは　うねびををしと　みみなしと　あひあらそひき　かむよより
如此尔有良之　古昔母　然尔有許曾　虚蟬毛　孀乎　相格良思
かくにあるらし　いにしへも　しかにあれこそ　うつせみも　つまを　あらそふらしき

このなかに音読(借用語)はない。訓読は“高山かぐやま、耳梨みみなし、與と、相諍競あひあらそひ、神代かむよ、従より・・・以下略”など。音仮名は“波は、雲う、志し、伎き・・・以下略”。訓仮名は“根火雄男ねびをを・・・以下略”。



■万葉集のパターン

さて『万葉集』の中から、文字表記のパターンを抜き出すと次のものがある。()内は「返り点」。

(ア) 自 (二) 高山 (一) 出来水 石觸 破衣念 妹不 (レ) 相夕耆
 たかやまゆ いでくるみづの いはにふれ くだけてぞおもふ いもにあはぬよは
 (2716 番)

(イ) 春野尔 霞多奈毘伎 宇良悲 許能暮影尔 鶯奈久母
 春の野に 霞たなびき うら悲し この暮影(夕影)に 鶯なくも
 (4290 番)

(ウ) 安麻乃波良 不自能之婆夜麻 己能久礼能 等伎由都利奈波 阿波受
 あまのはら ふじのしばやま このくれの ときゆつりなば あはず
 (3355 番)

(ア)の「自(ニ)高山(一)」と「不(レ)相」の部分は漢文である。万葉仮名は「衣」と「者」だけ。(イ)は表意文字の漢字と万葉仮名の混合文である。漢文の特徴はない。(ウ)はすべて万葉仮名。表意文字はない。これらは仮借と訓読を自在に利用して日本語を表記したものである。(ア)(イ)(ウ)の順に、次第に万葉仮名つまり表音文字として利用した漢字が増えていく。(ア)や(イ)には視覚に訴える工夫がみられるが、(ウ)は音声のみを表す備忘録のようにもみえる。いずれにしても、文字表記の初期においてどのようなことが起こるかということについて、いろいろなパターンを示していてもおもしろい。

■さて、漢字音を利用して日本語を表記した日本の資料のうち、誰によって書かれたかということの問題にしなければ、時期的にはやいものとして有名な稲荷山古墳出土の鉄剣銘がある。これには固有名詞の“獲加多支鹵”(ワカタケル)などが見える。紀元5世紀中ごろのことであるらしい。そして、『古事記』や『万葉集』(ともに8世紀頃)に到りその全盛となるわけであるが、漢字の変用のみによって、漢語以外の言語を、固有名詞だけでなく、その言語の全体を表記した例として、日本の万葉仮名資料は、変用文字研究の格好の対象といえよう。

もっとも、漢字を仮借して漢語以外の言語を全面的に記した例は他にもある。古来より、中国においては、仏典の漢訳と共に、サンスクリット語を漢字音で記した“陀羅尼”が作られた。また、時代は降るが14世紀後半の中国は明初において、蒙古語が漢字音を利用して表記した『甲種華夷訳語来文』や『元朝秘史』がある。これらは、サンスクリット語や蒙古語を第一言語とする者のために作られた資料ではなく、漢語を第一言語として使用する者のために作られた資料である。したがって、自国(中国語を第一言語とする者にとって)の言葉を表記したものではなく、外国語としてサンスクリット語や蒙古語を漢字音で表記したものであるから、万葉仮名とは性質が異なる。しかしながら、漢字の意味を捨てて字形と字音によって、漢語以外の言語を全面的に書き記した資料であり、変用文字の研究にとって得がたい比較対照の資料となる。

参考文献<発行年順>

- 武田祐吉 1954, 1955. 『万葉集 上巻』, 『万葉集 下巻』 東京: 角川書店。
鶴久 1977. 「万葉仮名」, 『岩波講座 日本語 8 文字』 東京: 岩波書店, 209-248 頁。
鶴久・森山隆 1977. 『万葉集』 (補訂版) 東京: 桜楓社。
小林芳規 1999. 『図説 日本の漢字』 東京: 大修館書店。
大島正二 2006. 『漢字伝来』 東京: 岩波書店。

(文責: 吉池孝一)